忘れないこと　あきらめないこと

園長　野中　泉

57 歳で亡くなった私の父は、「平和（へいわ）」という名前でした。小林平和。父が生まれたのは 1938 年の 1 月、その翌年 1939 年の 9 月は、いわゆる第二次世界大戦のはじまりといわれる英独戦争勃発。またその 2 年後には真珠湾攻撃で日本もその大きな戦争の中心に巻き込まれていくことになるのですから、まさに世界も日本もどんどん戦争に向かおうとしている、そんな不穏な時代、右傾化する世の中に生まれてきた自分の長男に「平和」と名付けた当時の祖父の思いを改めて想像すると、今更のように感慨深いものがあります。

父は生まれも育ちも東京の豊島区です。小さい頃はぷくぷくと太っていて、あだ名は「だるま」と言われていたとよく祖母が笑いながら話してくれました。その後、空襲が激しくなった東京を逃れ長野県にたったひとりで学童疎開《※》することになったとき、父はまだ小学校の 3 年生でした。その後半年ほどで終戦。東京に戻った父を祖父が上野駅に迎えにいったときの話を、私は寝物語に祖母から何十回も聞かされました。「だるまみたいやった平和ちゃんがな、痩せて、痩せて。ガリガリになっとってんな。かわいそうに、肩甲骨が天使の羽みたいに飛び出てな、誰かわからんくなって、お父さん、もう平和ちゃんは死んだと思って、よう探さんとあきらめて帰ってきてしもうたんよ。平和ちゃんは、平和ちゃんでな、誰も迎えに来てくれんから、ああ、自分の家は焼かれて、家族はみんな死んだんやなって思って、泣いとったら、友だちのお父さんが、見つけて連れて帰ってくれたんよ。まあ、心細かったやろうにねえ」。関西生まれの祖母の関西弁と、何十年もたっているのにこの話をする度に祖父に憤慨し、そしてガリガリだった小さな父を思い出しては毎回泣くその姿を、今でもはっきりと思い出します。

今年 24 歳になる娘のひなこが、小学校 4 年生の時、こうの史代さんの『この世界の片隅に』という漫画を読んでいて「えっ、知らなかった、日本も戦争をしたの？」と言うのを聞いて、呆れるよりも、ああ、そうか、家の中でも戦争の話をすることがなくなっていたんだとはっとしました。かきたてられるような思いで、私の父のこと母のこと、祖父母のことを話して聞かせたその日、小学生の娘はこんなふうに言いました。「遠い昔の知らない人の話じゃなくて、ひなの、おじいちゃんやおばあちゃんのことを、誰かが死んでもいいと思って、爆弾を落としたり、銃で殺そうとしたんだと思ったら、戦争はもっとこわくなった」。

第二次世界大戦で原爆が投下された広島では、戦後 77 年たった今も毎年 8 月 6 日に平和記念式典が行われますが、昨年 2021 年の式典での小学 6 年生の子ども代表による『平和の誓い』は、とても胸に残るものでした。
『本当の別れは会えなくなることではなく、忘れてしまうこと。
私たちは、犠牲になられた方々を決して忘れてはいけないのです。
私たちは、悲惨な過去をくり返してはいけないのです。

私たちの願いは、日本だけでなく、全ての国が平和であることです。
そのために、小さな力でも世界を変えることができると信じて行動したい。
誰もが幸せに暮らせる世の中にすることを、私たちは絶対に諦めたくありません。』　（2021 年度　平和の誓い　一部抜粋）

長男に「平和」と名付けた祖父は、戦後すぐに生まれた弟、四番目の子には「希望」という名前を付けました。
私も、世界中の全ての国が平和であることをあきらめない「ひとり」であり続けたい。小さな力でも誰もが幸せに暮らせる世の中に変えることができると信じて行動したい、そう改めて強く願う 8 月です。

※学童疎開　アメリカ軍の日本本土襲撃に備え、大都市の国民学校初等科児童を農村部に半強制的に分散移動した措置のこと